

中学生をもつ親の子育て状況・不安と子どもの特性

——「第7回愛知の子ども縦断調査」結果第1報——

山本理絵*¹・神田直子*²

1. 第7回愛知の子ども縦断調査と本研究の目的

愛知の子ども縦断調査は、2001年2月に1歳半から3歳の子どもをもつ親（保健センターを經由して依頼）が調査回答者となって始まった。その後同一の回答者を対象に今回（2013年3月）、第7回調査を行った。回答者の子どもたちのうち、2001年に1歳半であった子どもたちは今回中学校1年生（以下「中1」とする）となり、3歳であった子どもたちは中学校3年生（以下「中3」とする）となっている。なお、2001年調査時点で1歳半健診以降何らかの遅れや障害の疑いがあり2歳前後で保健センターのフォローアップグループに参加していた子どもたちは、今回中学校2年生（以下「中2」とする）となっているが、前二者のグループに比して障害（傾向）をもつ子どもが多く、グループ全体の人数も少数である。

これまで6回にわたって行われてきた調査については、詳しくはそれぞれの調査をもとに分析した論文を参照されたい^{1)~13)}。

第5回調査（2009年3月）からは、回答者を親（「親調査」）のみならず、その子どもにも広げ、郵送調査には「親調査用紙」だけでなく「子ども調査用紙」を同封し、学校や家族関係、学校生活、自尊感情について尋ね、調査用紙そのものには無記名であるが、両調査を同封して返送するよう依頼した。それにより、同一家庭での親側の回答と子ども側の回答をマッチングしながら関連をさぐるができることとなった。

第7回調査では、ほぼ第5回、6回調査の調査項目内容を踏襲しているが、LD傾向に関する項目を学年進行にあわせて変更し、子育てに関して必要なサポー

ト等について補足して尋ねている。

本論文では紙幅の関係から、親調査のうち、子育て不安、学校に関する不安、発達障害につながる特徴、学習障害（LD）傾向、親子関係や子どもの学習状況についての親の認知、近隣との関係、学校への要望、必要なサポートなどについて、学年別に集計する。その上で中学校1年生と中学校3年生の結果の比較、前回調査（2011年3月）の結果との比較（一部）を行うことにより、上記の項目について、中学生の時期への発達の变化をさぐることを目的とする。

2. 調査方法

(1) 調査対象者と時期

第6回調査回答者で子どもが小学校5年生～中学校1年生であった親490人のうち、「次回も協力してよい」と答え、かつ住所・氏名が明記してあった人469人（中学1年生219人、中学2年生22人、中学3年生228人）に第7回調査用紙を送付した。うち3通は「宛名不明」で返送されたため、送付可能であったのは、466通であった。回答記入の上返送されたのは426通であり、回答率は91.4%であった。調査郵送期間は2013年3月である。

(2) 分析項目

調査内容のうち、今回分析対象としたのは、下記の項目である。

① 子育て不安

子育て不安に関しては、第4回調査からは、特に発達障害関連の親のもつ不安項目を追加した¹⁴⁾が、第6回調査では学年進行に合わせて、一部項目を差し替えた。第7回調査項目は第6回調査と同様である。具体

表1 子育て不安項目と因子分析結果

		1	2	3
子育て・子どもへの不安	感情的に叱る	0.690	0.005	-0.065
	私には手に負えない子である	0.654	-0.126	0.022
	この子が将来何か問題を起すのではと不安	0.620	0.043	0.121
	この子のために色々なことをしても、気持ち通じない	0.599	-0.174	0.062
	自分の育て方悪かった	0.598	-0.099	0.071
	子どものことでどうしたらよいか分からなくなることがある	0.584	-0.005	-0.032
	この子の子育てについて「もっとこうすべき」と周りから言われる	0.557	0.052	0.030
	子どもが煩わしくてイライラする	0.538	0.083	0.085
子育て生活満足感	子どもを育てるのは楽しい	-0.056	0.672	0.135
	自分は子どもをうまく育てていると思う	-0.188	0.628	0.085
	自分は子育てに向いていると思う	-0.068	0.621	0.030
	子育てによって自分が成長していると感じられる	0.052	0.549	-0.001
	一日が充実してハツラツとしている	0.128	0.507	-0.341
	私は気分転換が上手な方である	0.293	0.417	-0.401
心身の疲労	身体の疲れがとれず、いつも疲れている感じがする	0.083	0.097	0.741
	考え事がおっくうで、いやになる時がある	0.167	0.068	0.718
Cronbach の α 係数		0.848	0.761	0.728

因子抽出法：主因子法 回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

表2 学校関連不安項目と因子分析結果

		1	2	3
友達関係	子どもが集団生活に参加できないこと	0.883	-0.106	0.030
	子どもに友達ができないこと	0.827	-0.084	0.063
	子どもが友達にいじめられること	0.805	0.085	-0.077
	子どもが学校に通うのを嫌がること	0.711	0.122	-0.060
勉強・躰	子どもに家庭学習の習慣がついていないこと	-0.075	0.837	0.032
	子どもの進路	-0.010	0.828	-0.095
	子どもが学校の勉強についていけないこと	0.052	0.782	0.015
	子どもの携帯やパソコンの使い方	0.010	0.495	0.032
	先生にしつけの悪い子と思われること	0.131	0.321	0.300
親どうしの関係	授業参観や保護者会に出ること	-0.095	-0.026	0.965
	自分自身が他のお母さん方と親しくなれない	0.256	0.021	0.452
Cronbach の α 係数		0.875	0.807	0.608

因子抽出法：主因子法 回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

的な質問項目は表1に示した17項目および「自分一人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう」の18項目である。回答は「まったくない」から「よくある」の4択式でそれぞれ0点から3点を配点した。点数が高いほど子育て不安が高いことを示す（「子育て生活満足感」因子に属する項目は、点数が低いほど、子育て不安が高い）。「自分一人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう」項目は、いずれの因子にも、0.35以上の因子負荷量を示さなかったため、それを除いた上で、再度因子分析を行った（表1）。

② 学校関連不安

学校に関連して親がもつ不安や心配ごと、すなわち勉強や友人関係に関する心配、親自身の学校での親仲間関係について尋ねている。第5回、6回調査と同様

の質問項目に、今回学年進行や最近の状況をふまえ、「子どもに家庭学習の習慣がついていないこと」、「子どもの携帯電話やパソコンの使い方」を付け加え11項目とした。回答は「そう思わない」から「そう思う」の4択式でそれぞれ0点から3点を配している。点数が高いほど学校関連不安が高いことを示す（表2）。

③ 広汎性発達障害（PDD）傾向

広汎性発達障害（PDD）、学習障害（LD）に関する質問項目については、第4回以後の調査と同様、文部科学省の「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」（2002年実施）の質問項目から抽出した¹⁵⁾。広汎性発達障害に関する質問項目は第6回調査における11項目から1項目増やして12項目を設定し（表3）、回答も、文部

表3 広汎性発達障害に関する質問項目

*1	他の子どもは興味を持たないようなことに興味があり、「自分だけの知識世界」を持っている
*2	会話のしかたが形式的であり、抑揚なく話したり間合いが取れなかったりすることがある
*3	とても得意なことがある一方で、極端に不得手なものがある
*4	いろいろな事を話す、その時の場面や相手の感情、立場を理解しない
*5	友だちと仲良くしたいという気持ちはあるけれど、友達関係をうまく築けない
*6	自分なりの独特な日課や手順があり、変更や変化を嫌がる
*7	独特な目つき、表情、姿勢をしていることがある
8	共感性に乏しい
*9	友達のそばにいても、ひとりで遊んでいる
**10	嫌みや含みのある言葉を言われてもわからず、言葉通りに受けとめてしまうことがある
**11	まわりの人が困惑するようなことも、配慮しないで言うてしまう
**12	他の子どもたちから、いじめられることがある

*2009年調査項目 **2011年追加項目

表4 学習障害に関する質問項目

*1	指示されたことの理解が難しい
*2	思いついたまま話す等、筋道の通った話をするのが難しい
*3	音読が遅い
*4	漢字の細かい部分を書き間違える
*5	聞き間違いがある
*6	内容を分かりやすく伝えることが難しい
7	文章の要点を正しく読み取ることが難しい
*8	読みにくい字を書く（漢字の形や大きさが整っていない。字をまっすぐに書けない）
*9	計算するのに時間がかかる
*10	早がてんや、飛躍した考えをする
*11	学年相応の文章題を解くのが難しい
12	事物の因果関係を理解することが難しい
**13	個別に言われると聞きとれるが、集団では難しい
**14	単語を羅列したり、短い文で内容的に乏しい話をする
*15	文中の語句や行を抜かしたり、または繰り返し読んだりする
16	句読点が抜けたり、正しく打つことができない
**17	答えを得るのにいくつかの手続きを要する問題を解くのが難しい
**18	学年相応の図形を描くことが難しい（見取り図や展開図）

*2009年調査項目（3と15はあわせて1項目としていた、4は一部修正した）
**2011年調査追加項目

科学省の評点にあわせて、いいえ（あてはまらない）—0、多少（多少あてはまる）—1、はい（あてはまる）—2とし、点数化した。

④ 学習障害 (LD) 傾向

LDに関する質問項目については、聴く、話す、読む、書く、計算する、推論するの6領域各5項目の中から、学年を考慮して親が家庭での子どもの様子から判断しやすいものを1領域3項目ずつ、合計18項目選んだ（表4）。回答は文部科学省の評点に合わせて、ない—0、まれにある—1、ときどきある—2、よくある—3とし、点数化した。

⑤ 子どもの成績についての親の認知

第5回調査から、子どもの学習（成績）について、家庭でどのようにかわり子どもの成績をどのように認知しているのかを尋ねる質問項目を新しく加えた。今回も第5回、6回調査の項目と同様のものを尋ねている。

⑥ 子どもの戸惑いや悩みに関する親の認知

今回の第7回調査で、新たに、この1年間子どもが、勉強面、友達関係、部活動関係、先生との関係等で戸惑ったり悩んだりしている様子があったかどうか、親の認知を尋ねた。

⑦ 親子関係についての親の認知

第5回調査より、親子関係や親の養育態度に関する質問も行った。これらは親の側からの認知であるが、「子ども調査」での子どもの側からの親子関係についての認知に関する質問回答とマッチングさせながら検討できるようにした。第7回調査においても、これを踏襲している。

⑧ 学校・地域とのかかわり

筆者らの調査でも、親の育児不安との関連が強い要因として「親の地域でのつながり」を見出してきた。子どもの年齢が上がったので、ごく身近な家の周りだけでなく、地域行事への参加も尋ねている。

⑨ 先生・学校に対する要望と満足度

第5回、6回調査と同様、先生・学校への要望を尋ねた。上記②で挙げた学校に関する不安や心配ごとを親が抱えている場合、それを要望として学校に伝えたのか、伝えた時学校側が対応してくれたのか、その対応に対して親が満足しているのかどうかを尋ねた。また、先生や学校への満足度と要望の程度について、内容別に尋ねた。

⑩ 子育ての支援に関するニーズ

前回同様、子育ての支えとなる人やグループ、子どもの特性や育て方についての情報についてのニーズを尋ねた。また今回新たに、子育ての支援ニーズとして、子どもの遊び場・居場所、経済的支援、相談の場、地域の人々との交流、先輩の父母との交流、将来の進路や職業を考える機会や出会いなどについてそれぞれ必要度を4件法で尋ねた。

(3) 倫理的配慮

プライバシー保護のため、調査は無記名で行った。ただし、前回までの個々人の回答データとマッチングするため、調査用紙にID番号をつけ、回答データはID番号によって管理し匿名化した。調査の依頼にあたっては、研究の目的、内容、方法、個人情報の保護などの説明を、調査用紙の表面・依頼文に記述し、調査への回答協力が任意であること、個々の質問についても、回答したくない質問や回答しにくい質問には、

回答する必要があること、回答しないことによる不利益もないこと、個々の回答や個人が特定されるような情報は発表しないことを明記した。なお、本研究の実施については、2013年2月に愛知県立大学研究倫理審査委員会に審査を申請し、許可を得ている。

3. 結果と考察

(1) 対象者の属性

回答者は、これまでと同様、すべて子どもの母親である。表5は、回答者の子どもの学年（以下「学年」と省略する）別に、回答者の属性を表している。

同一の回答者群に対して行っている調査であるので、前回調査時点と親や子どもの基本的属性はほとんど変わらない。「母親の就業状況」については、第5回調査の小学校3年生、5年生では専業主婦の比率が3割程度であったが、第6回調査では小学校5年生26.7%、中学校1年生25.7%となり、今回調査ではそれより若干少なくなっており、正規やパート就労が増える傾向にある。

家庭の年収に関しては、600万円以上が中学校1年生では45.6%、中学校3年生で64.9%であった。前回の第6回調査では600万円以上が小学校5年生で50.0%で中学校1年生で64.3%あったので、今回同じ対象学年の中1では減っていることがわかる。

子どものきょうだい数、特別支援学級に行っている

表5 対象者の属性（学年別）

		中学校1年	中学校2年	中学校3年	合計	中1と中3の差	
母親・家族の状況	回答者	202 (46.1)	21 (4.7)	203 (49.2)	426(100.0)		
	母親の就業状況	専業主婦	44 (22.0)	3 (14.3)	50 (24.6)	97 (22.9)	n.s.
		正規雇用	24 (12.0)	2 (9.5)	26 (12.8)	52 (12.3)	
		パート等	113 (56.5)	14 (66.7)	110 (54.2)	267 (55.9)	
		自営	13 (6.5)	2 (9.5)	10 (4.9)	25 (5.9)	
	配偶者有	有	190 (95.0)	20 (95.2)	194 (95.6)	404 (95.3)	n.s.
		無	10 (5.0)	1 (4.8)	9 (4.4)	20 (4.7)	
	家庭の年収（税込み）	200万円未満	6 (3.2)	0 (0)	4 (2.1)	10 (2.5)	**
		400万円未満	32 (16.9)	3 (14.3)	18 (9.3)	53 (13.1)	
		600万円未満	65 (34.4)	9 (42.9)	46 (23.7)	120 (29.7)	
800万円未満		43 (22.8)	4 (19.0)	60 (30.9)	107 (26.5)		
800万円以上		43 (22.8)	5 (23.8)	66 (34.0)	114 (28.2)		
子どもの状況	子どもの性別	男	100 (49.5)	11 (52.4)	90 (44.3)	201 (47.2)	n.s.
		女	102 (50.5)	10 (47.6)	113 (55.7)	225 (52.8)	
	特別支援学級	行っている	2 (1.0)	1 (4.8)	3 (1.5)	6 (1.4)	n.s.
		行っていない	199 (99.0)	20 (95.2)	200 (98.5)	419 (98.6)	
	きょうだい	有	186 (92.1)	19 (90.5)	182 (89.7)	387 (90.8)	n.s.
		無	16 (7.9)	2 (9.5)	21 (10.3)	39 (9.2)	
子どもの持病・障害	有	21 (10.5)	4 (20.0)	23 (11.3)	48 (11.3)	n.s.	
	無	179 (89.5)	16 (80.0)	180 (88.7)	375 (88.7)		

χ²検定：**p<.01

かや、子どもの持病や障害の有無についてはほぼ前回と変わらない。第7回調査の中学校2年生は、第1回調査（2001調査）時点の1歳半健診後のフォローアップグループ参加者が中心であるので、他学年と比べ「子どもの持病・障害」をもつ比率が依然として高く2割程度となっている。「特別支援学級に行っていない」の中には、支援学級ではなく支援学校に行っている人、自分の子どもが通級している学級が公的に「特別支援学級」と呼ばれていることを知らない人もいる可能性がある。障害や持病の内容についての自由記述を見ながら分析する必要がある。

(2) 子育て不安

子育て不安18項目に対して主因子法による因子分析を行った。スクリープロットの結果より、3因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度3因子を仮定して主因子法・プロマックス回転による因子分析をしたが、6項目目の「自分ひとりで子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう」は、負荷量がどの因子にも.35以下であったので、除いた。

各因子は、次のように解釈される。第1因子は「感情的に叱る」「手に負えない子である」などの項目からなり、「子育て・子どもへの不安」と命名した。第2因子は「子どもを育てるのは楽しい」「自分は子ども

表6 因子別子育て・学校関連不安得点 (学年別)

		人数	平均値	標準偏差
子育て・子どもへの不安	中1	201	9.64	4.87
	中2	20	10.45	4.22
	中3	203	9.32	4.39
	合計	424	9.52	4.61
子育て生活満足	中1	200	11.82	2.79
	中2	21	10.52	3.03
	中3	200	11.81	2.83
	合計	421	11.75	2.83
心身の疲労	中1	201	2.84	1.52
	中2	21	3.24	0.94
	中3	203	3.03	1.47
	合計	425	2.95	1.48
友達関係	中1	202	1.23	2.38
	中2	21	2.05	3.37
	中3	203	1.37	2.46
	合計	426	1.34	2.48
勉強・躰	中1	198	4.25	3.78
	中2	21	5.05	3.91
	中3	202	3.70	3.34
	合計	421	4.03	3.59
親どうしの関係	中1	200	0.82	1.27
	中2	20	0.75	1.25
	中3	202	0.79	1.18
	合計	422	0.80	1.22

中1と中3 χ^2 検定：n.s.

表7 子育てのストレスの自己認識 (学年別)

		よく思う	ときどき思う	あまり思わない	全然思わない
ストレスを軽減したい	中1 人数	17	77	85	21
	中1 %	8.5%	38.5%	42.5%	10.5%
	中2 人数	2	11	6	2
	中2 %	9.5%	52.4%	28.6%	9.5%
子育てから解放されたい	中3 人数	14	73	97	17
	中3 %	7.0%	36.3%	48.3%	8.5%
	合計 人数	33	161	188	40
	合計 %	7.8%	38.2%	44.5%	9.5%
子育てから解放されたい	中1 人数	8	55	81	56
	中1 %	4.0%	27.5%	40.5%	28.0%
	中2 人数	0	9	10	2
	中2 %	0.0%	42.9%	47.6%	9.5%
子育てから解放されたい	中3 人数	6	56	99	40
	中3 %	3.0%	27.9%	49.3%	19.9%
	合計 人数	14	120	190	98
	合計 %	3.3%	28.4%	45.0%	23.2%

中1と中3 χ^2 検定：n.s.

もをうまく育てている」などの項目からなり、「子育て生活満足感」と命名した。第3因子は「身体の疲れがとれず、いつも疲れている」「考え事がおっくう」などの項目からなる「心身の疲れ」である。Cronbachの α 係数は、それぞれ0.848, 0.761, 0.728であり、内的整合性は十分であるといえる。これらの結果は、第6回調査の小学校5年生～中学校1年生を対象にしたものと同様となった。子育て不安項目の得点を、各因子別に合計し、学年別にみたものが、表6である。

中1と中3とでは3因子別の得点に有意差はなかった。また、因子内の項目が同じである子育て不安得点について前回の調査と比較したが、差はなかった。前回調査の結果と合わせるとこれらの子育て不安については、小学校高学年から学年全体としてみれば、大きな変動はないといえる。

我が子が成長したと感じるかどうかについては、「よくある」が中1で52.0%、と中3で56.7%であったが、中2では25.0%であった。

今後の子育てについて尋ねたところ、「ストレスを軽減したい」については「よくそう思う」は全体の約1割、「時々そう思う」は約4割、「子育てから解放されたい」は「よくそう思う」3%、「ときどきそう思う」3割であった(表7)。いずれも、中1と中3の有意な差はみられなかったが、中2グループに「時々そう思う」がやや多い傾向がみられた。

(3) 学校関連不安

学校関連不安については、11項目に対して主因子

法による因子分析を行った。因子の解釈可能性を考慮すると、3因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度3因子を仮定して主因子法・プロマックス回転による因子分析をした。

各因子は、次のように解釈される。第1因子は「集団生活になじめないのではないか」「ともだちにいじめられる」などの項目からなり、「子どもどうしの関係」と命名した。第2因子は「子どもに家庭学習の習慣がついていないこと」「子どもの進路に関すること」などの項目からなり、「勉強・躰」と命名した。第3因子は「授業参観や保護者会に親が出ること」「自分自身が他の子のお母さんと親しくなれないこと」などの項目からなる「親どうしの関係」である。Cronbachの α 係数は、それぞれ0.875, 0.807, 0.680であり、内的整合性については満足できる水準である。

小学校5年生～中学校1年生を対象にした第6回調査では、2因子構造であったが、それと比べると「友達・親どうしの関係」が、「子どもどうしの関係」と「親どうしの関係」に分かれた。これは、前記のように項目を増やしたことが関係していると思われる。

学校不安得点を各因子別に合計し、学年別にみたものが、表6である。中1と中3とでは3因子別の得点に有意差はなかった。小学校高学年以降、学校に関連する不安については、学年全体としてみれば、大きな変動はないといえる。第6回調査で、「勉強・躰」因子において小5と中1との間に有意差があったが、今回は同じ中学生を対象としたことと、中3は高校等受験後であったため、差がみられなかったと考えられる。

(4) 広汎性発達障害傾向

広汎性発達障害に関する質問12項目の回答の合計点分布は、0点～23点(最高24点中)であった。得点が高いほど広汎性発達障害の傾向を強くもっていることを表している。0点と1点の子どもは中1で61.1%、中3で69.5%であり、中3の方が多くなっている。各学年の平均点と標準偏差は表8のとおりである。学年の平均点より1標準偏差以上の得点は、中1で6.2点以上(15.5%)、中3で5.0点以上(14.0%)であった。文部科学省の調査では評点の合計が22ポイント以上(最高54ポイント)の児童生徒を、『対人関係やこだわり等』の問題を著しく示す児童生徒」としてピックアップしているが、その評点比率にあわせると本研究では24満点中10点以上にあたり、中1では、7.0%、中2で20.0%、中3では4.5%となる。先に述べたように、中2は、健診事後のフォローアップ

表8 PDD, LD 合計点 (学年別)

		人数	平均値	標準偏差	中1と中3の差
PDD 合計点	中1	201	2.5	3.7	n.s.
	中2	20	4.7	5.9	
	中3	201	1.8	3.2	
	合計	422	2.2	3.6	
LD 合計点	中1	189	9.7	11.1	*
	中2	20	15.8	14.0	
	中3	200	7.1	9.5	
	合計	409	8.7	10.7	

χ^2 検定: * $p < .05$

グループ参加者や障害をもっている子どもが多く含まれているので、点数が高い子どもの比率も高くなっているであろう。

文部科学省の調査では、中学校の通常学級における「対人関係やこだわり等」の問題を著しく示す生徒は、2002年調査結果で0.8%、2012年度調査結果では、0.9%であった。「学習面または行動面で著しい困難を示す生徒」は中学生で4.0%(中1 4.8%、中2 4.1%、中3 3.2%)であった。この調査の対象には特別支援学級在籍の子どもも含まれていることもあり、それに比べると中1・中3とも高い比率となっている。平均点を学年全体でみると、中1と中3との間には有意差はない(表8)。

(5) 学習障害傾向

学習障害(LD)に関する全質問18項目の回答の合計点の分布は、0点～53点(最高54点中)であった。得点が高いほどLDの傾向を強くもっていることを表している。中1は、約半数が5点以下、中3は、約半数が3点以下であった。各学年の平均点と標準偏差は表8のとおりである。PDD傾向と同様学年全体でみると、中1と中3では、有意に中1の方が平均得点が高かった(表8)。各学年の平均点より1標準偏差以上の得点は、中1で21点以上(15.3%)、中3で17点以上(14.0%)である。なお、文部科学省の2012年調査では、「学習面で著しい困難を示す生徒」は、中学生で2.0%(中1 2.7%、中2 1.9%、中3 1.4%)であった。

(6) 子どもの成績についての親の認知

「お子さんの学校での成績は、クラスの中でどのくらいですか」と、成績の相対的位置を尋ねた結果は、表9のようになった。中1と中3では有意な差がなかった。

中の下以下と回答した人は、第6回調査の小学校5年生で9.0%であったが、中学生になってその3倍くらいに増えており、学校等でのより相対的な成績評価

表9 子どもの成績についての親の自認（学年別）

		上位	中の上	中	中の下	下位
中1	人数	46	48	51	29	25
	%	23.1%	24.1%	25.6%	14.6%	12.6%
中2	人数	4	2	5	4	6
	%	19.0%	9.5%	23.8%	19.0%	28.6%
中3	人数	47	50	54	29	23
	%	23.2%	24.6%	26.6%	14.3%	11.3%
合計	人数	97	100	110	62	54
	%	22.9%	23.6%	26.0%	14.7%	12.8%

中1と中3 χ^2 検定：n.s.

表10 学習塾（学年別）

		通っている	通っていない
中1	人数	142	60
	%	70.30%	29.70%
中2	人数	17	4
	%	81.00%	19.00%
中3	人数	106	97
	%	52.20%	47.80%
合計	人数	265	161
	%	62.20%	37.80%

中1と中3 χ^2 検定：*** $p<.001$

が反映されていると考えられる。一方で、中3は前回調査で中1のときに「上位」との回答が18.3%であったのが、今回中3で23.2%に増えている。なお、どの項目においてもそうであるが、中2は、幼児期より障害や発達の遅れの疑いのある子どもたちであり、少人数で統計的検定はできないが、「中の下」や「下」の比率が高い傾向がある。

学習塾に行っている（通信教育を含む）子どもは中1で7割、中2で8割、中3で5割ほどであった。中3が少ないのは、調査時期が高校受験後であったことが影響していると思われる（表10）。

(7) 子どもの戸惑いや悩みについての親の認知

子どもが戸惑ったり悩んだりしている様子があったかどうか尋ねたところ、表11のとおりであった。勉強面で子どもの戸惑いや悩みがあったと思っている母親が5～6割と最も多く、親子関係に関するものは比較的少なかった。友達関係や部活動関係についての悩みは、中1より中3の方が少なく認識されているが、これは、中3は、受験等に向けて勉強に集中するようになり、部活動も引退していく時期であることと、親の目からは見えにくい部分であることが影響していると思われる。発達上課題をもつ子どもが多いこ

表11 子どもの戸惑い・悩みの様子（学年別）

		あった	なかった	よくわからない	中1と中3の差
1. 学校での勉強面	中1	47.8%	44.3%	8.0%	n.s.
	中2	40.0%	45.0%	15.0%	
	中3	57.4%	36.6%	5.9%	
	合計	52.0%	40.7%	7.3%	
2. 友達関係	中1	32.5%	57.0%	10.5%	**
	中2	40.0%	60.0%	0.0%	
	中3	18.7%	70.4%	10.8%	
	合計	26.2%	63.6%	10.2%	
3. 学校の先生との関係	中1	17.9%	74.1%	8.0%	n.s.
	中2	35.0%	60.0%	5.0%	
	中3	10.8%	79.3%	9.9%	
	合計	15.3%	75.9%	8.7%	
4. 部活動	中1	38.5%	51.0%	6.0%	***
	中2	30.0%	55.0%	5.0%	
	中3	19.8%	70.8%	7.4%	
	合計	29.1%	60.7%	6.6%	
5. 親子関係	中1	19.4%	67.7%	12.9%	**
	中2	10.0%	70.0%	20.0%	
	中3	16.3%	68.0%	15.8%	
	合計	17.5%	67.9%	14.6%	
6. その他	中1	13.1%	67.8%	19.1%	***
	中2	15.0%	50.0%	35.0%	
	中3	14.9%	66.3%	18.8%	
	合計	14.0%	66.3%	19.7%	

χ^2 検定：** $p<.01$, *** $p<.001$

とが予測される中2のグループは、統計的には差を論じることはできないが、我が子が学校の先生との関係や友達関係で悩んでいる姿を認識している母親が多い傾向にある。なお、部活動に参加していないと回答した人は、中1で4.5%、中2で10.0%、中3で2.0%、全体で3.6%であり、それらと表中の数字を合計して100%となる。

(8) 親子関係についての親の認知

親自身と自分の子どもとの関係について、親がどう思っているかについての質問への回答をみてみよう。

「子どもと勉強や進路のことについて話をする」ことは、「よくある」、「時々ある」を合わせると9割に

のぼり、この比率は中1より中3の方が有意に高い(表12)。とくに中3は高校等受験の年度であったので、進路や勉強などについて親子で話をせざるを得ない様子が窺われる。「学校での出来事や友達のことについて話をする」は中1と中3の有意差はないが、中1では「勉強や進路」よりは学校や友達のことをよく話す人の比率が高い(表12)。本調査の回答者においては、親子間で学校に関する事柄についての話し合いはよく持たれていると思っている人が多いようである。小学生のときより、中学生になってからのほうが勉強面についてはより話し合うようになっており、学校や友達関係のことについても、話し合いをする親の

表12 子どもと話す(学年別)

		よくある	時々ある	あまりない	全然ない	中1と中3の差	
勉強・進路を子どもと話す	中1	人数 68 % 34.0%	113 56.5%	18 9.0%	1 0.5%	***	
	中2	人数 7 % 35.0%	12 60.0%	1 5.0%	0 0.0%		
	中3	人数 90 % 44.3%	105 51.7%	8 3.9%	0 0.0%		
	合計	人数 165 % 39.0%	230 54.4%	27 6.4%	1 0.2%		
	中1	人数 106 % 53.0%	78 39.0%	16 8.0%	0 0.0%		n.s.
	中2	人数 9 % 45.0%	9 45.0%	2 10.0%	0 0.0%		
中3	人数 96 % 47.3%	95 46.8%	10 4.9%	2 1.0%			
合計	人数 211 % 49.9%	182 43.0%	28 6.6%	2 0.5%			

χ^2 検定: *** $p < .001$

表13 養育態度(学年別)

		よくある	時々ある	あまりない	全然ない
子どもがしていることを黙って見ていられなくて、干渉する	中1	人数 25 % 12.5%	116 58.0%	52 26.0%	7 3.5%
	中2	人数 2 % 10.0%	16 80.0%	2 10.0%	0 0.0%
	中3	人数 29 % 14.3%	116 57.1%	53 26.1%	5 2.5%
	合計	人数 56 % 13.2%	248 58.6%	107 25.3%	12 2.8%
子どもを感情的に叱ってしまう	中1	人数 15 % 7.4%	98 48.5%	70 34.7%	19 9.4%
	中2	人数 1 % 4.8%	10 47.6%	10 47.6%	0 0.0%
	中3	人数 16 % 7.9%	99 48.8%	69 34.0%	19 9.4%
	合計	人数 32 % 7.5%	207 48.6%	149 35.0%	38 8.9%

中1と中3 χ^2 検定: n.s.

表14 子どものあるがママを受け入れていきたい (学年別)

		今そうして いるのでこ のままでよ い	今そうして いるが、 もっとそ うしたい	今そうして いないが、 このまま よい	今そうして いないの で、今後 はそうし たい
中1	人数	106	69	4	21
	%	53.0%	34.5%	2.0%	10.5%
中2	人数	10	7	0	3
	%	50.0%	35.0%	0.0%	15.0%
中3	人数	127	51	11	13
	%	62.9%	25.2%	5.4%	6.4%
合計	人数	243	127	15	37
	%	57.6%	30.1%	3.6%	8.8%

中1と中3 χ^2 検定: * $p < .05$

比率はそれほど下がってはいない。

また、親の干渉的な態度を調べる項目「子どもがしていることを黙って見ていられなくて、干渉する」は「よくある」が1割強、「時々ある」が約6割であった。「子どもを感情的に叱ってしまう」は、「よくある」が1割弱、「時々ある」が5割であり、どちらも中1と中3の有意な差はなかった(表13)。第6回調査でもほぼ同様の結果であった。

「子どものあるがママを受け入れていきたい」については、「今そうしているのでこのままでよい」は中1で約5割、中3で約6割あり、「今そうしてないので今後はそうしたい」が中1のほうがやや多かった(表14)。しかしこれはいづれにしても「親の側からの認知」であり、同時に行った「子ども調査」と関連させながら、子どもの側からの親子関係についての認知とのズレ・一致を検討する必要があるだろう。

(9) 学校・地域でのかかわりと相談

「PTA役員など学校の仕事の手伝い」や、「学校のクラス懇談会など」によく参加する母親の比率は、第6回調査で小5に比べ中1では有意に低かったが、今回の調査で中1と中3では有意差はなかった(表15、16)。中2のグループは、前回調査までは、参加する頻度が他の学年に比べて少ない傾向にあったが、今回は他の学年よりもよく参加する傾向がみられた。進路について不安が増し、相談することが増えたのではないかと予想される。

「地域や自治体のイベントや行事」に参加することに関しては、学年による有意差がある。中1より中3の方が「よくある」が少なく、「あまりない」「全然ない」が多くなっている(表17)。中3は子どもの受験等を控えて、親の地域の行事への参加も減ったのかもしれない。

表15 PTA役員など学校の仕事の手伝いをする (学年別)

		よくある	時々ある	あまりない	全然ない
中1	人数	34	90	50	28
	%	16.8%	44.6%	24.8%	13.9%
中2	人数	2	7	10	2
	%	9.5%	33.3%	47.6%	9.5%
中3	人数	28	92	59	24
	%	13.8%	45.3%	29.1%	11.8%
合計	人数	64	189	119	54
	%	15.0%	44.4%	27.9%	12.7%

中1と中3 χ^2 検定: n.s.

表16 学校のクラス懇談会(保護者会)などに参加する (学年別)

		よくある	時々ある	あまりない	全然ない
中1	人数	91	61	40	10
	%	45.0%	30.2%	19.8%	5.0%
中2	人数	11	7	3	0
	%	52.4%	33.3%	14.3%	0.0%
中3	人数	87	73	34	9
	%	42.9%	36.0%	16.7%	4.4%
合計	人数	189	141	77	19
	%	44.4%	33.1%	18.1%	4.5%

中1と中3 χ^2 検定: n.s.

表17 地域や自治体のイベントや行事に参加する (学年別)

		よくある	時々ある	あまりない	全然ない
中1	人数	28	102	50	21
	%	13.9%	50.7%	24.9%	10.4%
中2	人数	2	7	12	0
	%	9.5%	33.3%	57.1%	0.0%
中3	人数	11	98	60	34
	%	5.4%	48.3%	29.6%	16.7%
合計	人数	41	207	122	55
	%	9.6%	48.7%	28.7%	12.9%

中1と中3 χ^2 検定: ** $p < .01$

表18 子どもの友達の親と話をする (学年別)

		よくある	時々ある	あまりない	全然ない
中1	人数	56	90	49	7
	%	27.7%	44.6%	24.3%	3.5%
中2	人数	4	14	3	0
	%	19.0%	66.7%	14.3%	0.0%
中3	人数	39	105	47	12
	%	19.2%	51.7%	23.2%	5.9%
合計	人数	99	209	99	19
	%	23.2%	49.1%	23.2%	4.5%

中1と中3 χ^2 検定: n.s.

「子どもの友達の親と話をする」は、中1と中3の有意差はみられなかったが、中3は中1より「よくある」が8.5ポイント少なく19.2%である(表18)。小学校3年生、5年生のときは「よくある」が3割前後

表19 相談相手 (学年別)

	夫	近所知人	祖父母	先生	友人	相談機関	カウンセラー	その他
中1	101 75.9%	68 51.1%	40 30.1%	30 22.6%	44 33.1%	4 3.0%	8 6.0%	12 9.0%
中2	12 66.7%	12 66.7%	9 50.0%	7 38.9%	5 27.8%	2 11.1%	1 5.6%	2 11.1%
中3	92 80.7%	61 53.5%	44 38.6%	26 22.8%	42 36.8%	2 1.8%	1 0.9%	14 12.3%
合計	205 77.4%	141 53.2%	93 35.1%	63 23.8%	91 34.3%	8 3.0%	10 3.8%	28 10.6%
中1と中3の差	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	*	n.s.

中1と中3 χ^2 検定: * $p<.05$

表20 子育ての支えとなる人やグループ (学年別)

	今あり、このままでよい	今あるが増やしたい	今ないが、このままでよい	今ないので増やしたい
中1 人数	119	34	39	8
%	59.5%	17.0%	19.5%	4.0%
中2 人数	13	3	4	1
%	61.9%	14.3%	19.0%	4.8%
中3 人数	120	27	44	10
%	59.7%	13.4%	21.9%	5.0%
合計 人数	252	64	87	19
%	59.7%	15.2%	20.6%	4.5%

中1と中3 χ^2 検定: n.s.

「子育ての支えとなる人やグループ」については、中1と中3で有意差はなく、一番多いのは「今あり、このままでよい」であった。中1と中3については前回調査の小5と中1の結果とあまり変化がなかったが、中2については、小6のとき「今あり、このままでよい」が43.5%であったのが今回61.9%に増え、「今ないがこのままでよい」が26.1%から19.0%に減っており、好ましい変化がみられた(表20)。この変化の具体的状況について自由記述等から把握していきたい。

(10) 学校・先生への要望と満足度

学校や先生に関する要望を先生に伝えたことがある親は、中1と中3は有意差がなく約5割となっている

あったが、学年が進むにつれて減少してきている。

先に(3)でみたような「学校関連不安」について、不安や心配な事を相談したことがあるかについて尋ねたところ中1では74.9%、中2では89.5%、中3では65.9%の人が相談しており、相談相手は最も多いのが、夫である。次いで近所の知人、祖父母・友人、先生となっている(表19)。前回調査の小5では、相談相手は友人より先生の方が多かったが、中学生全体では逆になっている。ただし、中2については、友人よりも先生が多く、相談機関も多くなっている。

表21 要望を伝えたことがあるか (学年別)

	伝えたことがある	伝えたことがない
中1 人数	99	93
%	51.6%	48.4%
中2 人数	13	8
%	61.9%	38.1%
中3 人数	99	102
%	49.3%	50.7%
合計 人数	211	203
%	51.0%	49.0%

中1と中3 χ^2 検定: n.s.

表22 要望を伝えなかった理由 (学年別)

	要望がなかった	改善が期待できない	言いにくい	伝える機会がない	その他	合計
中1 人数	60	7	9	9	6	91
%	65.9%	7.7%	9.9%	9.9%	6.6%	100.0%
中2 人数	5	1	2	0	0	8
%	62.5%	12.5%	25.0%	0.0%	0.0%	100.0%
中3 人数	66	12	12	9	2	101
%	65.3%	11.9%	11.9%	8.9%	2.0%	100.0%
合計 人数	131	20	23	18	8	200
%	65.5%	10.0%	11.5%	9.0%	4.0%	100.0%

中1と中3 χ^2 検定: n.s.

表23 学校は対応してくれたか(学年別)

		してくれた	してくれない
中1	人数	85	14
	%	85.9%	14.1%
中2	人数	11	2
	%	84.6%	15.4%
中3	人数	89	9
	%	90.8%	9.2%
合計	人数	185	25
	%	88.1%	11.9%

中1と中3 χ^2 検定: n.s.

表24 学校の対応に満足しているか(学年別)

		満足していない	満足している	どちらとも言えない
中1	人数	11	51	34
	%	11.5%	53.1%	35.4%
中2	人数	0	6	5
	%	0.0%	54.5%	45.5%
中3	人数	9	57	27
	%	9.7%	61.3%	29.0%
合計	人数	20	114	66
	%	10.0%	57.0%	33.0%

中1と中3 χ^2 検定: n.s.

(表21)。子どもが小学生のときまでは7割ほどであったが、中学生になって減っている。要望を伝えなかった人の理由は、65.5%が「要望がなかった」であり、「改善が期待できない」「言いにくい」「伝える機会がない」がそれぞれ1割程度あった(表22)。要望を伝えた人のうち、学校の対応があった人は9割弱で、対応してもらえなかった人が前回調査に比べて若干増えている(表23)。その対応に満足している人は対応のあった人のうちの5~6割弱である(表24)。

学校や先生に対する満足度と要望について内容別に尋ねた結果は、表25のとおりである。「部活動の充実」についてはほぼ半数が満足しており、最も満足度が高かった。ただし、これからまだ部活動が続く中1に関しては、さらに要望する人も3割いた。続いて「先生の子どもの個性や特性の理解」についても「満足している」が5割弱と高かった。「宿題を適切に出してもらう」も、中2で満足度がやや低かったが、全体では4割強が満足している。しかし、「授業でわかりやすく丁寧に教えてもらう」ことに関しては、満足しているのは3割ほどであり、3割ほどの親はさらに要望している。「授業が理解できていない場合の補習や個別のフォロー」も、中1より中3の方が満足度が高いものの、全体で4分の1ほどの人しか満足しておらず、4割の親はさらに要望している。「進路や受験に関する適切な情報提供」に関しては、満足している人は、中1が2割であるのに対して受験等の時期

表25 学校や先生に対する満足度(年齢別)

		満足している	どちらともいえない	もっと要望する	中1と中3の差
1. 先生の子どもの個性や特性の理解	中1	43.7%	37.2%	19.1%	n.s.
	中2	42.9%	28.6%	28.6%	
	中3	48.0%	35.6%	16.3%	
	合計	45.7%	36.0%	18.2%	
	中1	26.1%	40.7%	33.2%	
中2	19.0%	47.6%	33.3%		
中3	30.7%	44.1%	25.2%		
合計	28.0%	42.7%	29.4%		
中1	43.7%	37.2%	19.1%	n.s.	
中2	28.6%	57.1%	14.3%		
中3	44.6%	42.1%	13.4%		
合計	43.4%	40.5%	16.1%		
中1	21.2%	28.8%	50.0%		*
中2	19.0%	33.3%	47.6%		
中3	27.7%	37.1%	35.1%		
合計	24.2%	33.0%	42.8%		
中1	29.1%	47.7%	23.1%	**	
中2	28.6%	47.6%	23.8%		
中3	45.5%	35.1%	19.3%		
合計	37.0%	41.7%	21.3%		
中1	22.2%	31.8%	46.0%		***
中2	19.0%	23.8%	57.1%		
中3	42.6%	23.3%	34.2%		
合計	31.8%	27.3%	40.9%		
中1	46.2%	26.1%	27.6%	**	
中2	52.4%	38.1%	9.5%		
中3	47.3%	37.3%	15.4%		
合計	47.0%	32.1%	20.9%		
中1	33.3%	41.9%	24.7%		n.s.
中2	33.3%	52.4%	14.3%		
中3	37.6%	46.5%	15.8%		
合計	35.4%	44.7%	20.0%		
中1	32.2%	45.7%	22.1%	n.s.	
中2	23.8%	47.6%	28.6%		
中3	32.3%	50.7%	16.9%		
合計	31.8%	48.2%	20.0%		

χ^2 検定: * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

であった中3が4割とより満足している人が多く、より適切な情報提供がなされていたと思われるが、さら

に要望する人も、全体の4割と多い。「子どもの様子や友達関係などへの先生の目配り」については、満足している人が中1で3割、中3で5割弱と差がみられたが、さらに要望する人の割合はあまり変わらなかった。

「学校の様子を知らせてもらうこと」や「保護者が気軽に質問・相談できる」ことについては、満足度は

全体で3分の1ほどであるが、もっと要望する人は2割ほどで、「どちらともいえない」と考える人が半数ほどおり、それほど期待をしているわけではない。

(II) 子育ての支援ニーズ

子育ての支援ニーズとして、表26のような項目について必要度を尋ねた。すべての項目で中1と中3の有意差は認められなかった。「1.子どもが思いっきり

表26 子育てに必要な支援（年齢別）

		まったく必要 ない	あまり必要 ない	やや必要で ある	とても必要 である
1. 子どもが思いっきり 遊べる公園や遊び場	中1	1.5%	7.5%	41.5%	49.5%
	中2	4.8%	19.0%	33.3%	42.9%
	中3	2.5%	12.8%	35.5%	49.3%
	合計	2.1%	10.6%	38.2%	49.1%
2. 家庭外で子どもが安 心して過ごせる居場 所	中1	1.0%	9.0%	46.3%	43.8%
	中2	4.8%	9.5%	28.6%	57.1%
	中3	2.5%	7.4%	39.9%	50.2%
	合計	1.9%	8.2%	42.4%	47.5%
3. 無料あるいは安価で 勉強を教えてくれる 場	中1	1.5%	14.4%	40.3%	43.8%
	中2	0.0%	28.6%	33.3%	38.1%
	中3	2.5%	13.3%	45.3%	38.9%
	合計	1.9%	14.6%	42.4%	41.2%
4. 子どもや子育てにつ いて親どうしおしゃ べりができる場	中1	3.0%	28.1%	52.3%	16.6%
	中2	0.0%	28.6%	42.9%	28.6%
	中3	4.4%	24.6%	46.3%	24.6%
	合計	3.5%	26.5%	48.9%	21.0%
5. 先輩の父母のお話を 聞く機会	中1	4.0%	32.8%	50.2%	12.9%
	中2	0.0%	38.1%	42.9%	19.0%
	中3	3.9%	27.6%	51.2%	17.2%
	合計	3.8%	30.6%	50.4%	15.3%
6. 子どもの発達や育ち について相談する専 門機関	中1	3.5%	20.4%	51.2%	24.9%
	中2	0.0%	19.0%	47.6%	33.3%
	中3	3.9%	20.2%	47.3%	28.6%
	合計	3.5%	20.2%	49.2%	27.1%
7. 学校についての第3 者への相談窓口	中1	1.0%	15.4%	47.3%	36.3%
	中2	0.0%	23.8%	38.1%	38.1%
	中3	3.4%	12.3%	50.7%	33.5%
	合計	2.1%	14.4%	48.5%	35.1%
8. 経済的支援	中1	3.0%	5.5%	39.0%	52.5%
	中2	0.0%	4.8%	33.3%	61.9%
	中3	2.5%	10.8%	37.4%	49.3%
	合計	2.6%	8.0%	38.0%	51.4%
9. 子どもや子育てにつ いての講演会	中1	2.5%	38.0%	52.5%	7.0%
	中2	0.0%	42.9%	33.3%	23.8%
	中3	4.4%	35.0%	50.7%	9.9%
	合計	3.3%	36.8%	50.7%	9.2%
10. 子どもが地域の人々 と交流できる機会	中1	1.0%	14.4%	62.7%	21.9%
	中2	0.0%	38.1%	38.1%	23.8%
	中3	2.5%	17.7%	58.6%	21.2%
	合計	1.6%	17.2%	59.5%	21.6%
11. 将来の進路や職業を 考える機会や出会い	中1	1.0%	2.0%	33.8%	63.2%
	中2	0.0%	9.5%	38.1%	52.4%
	中3	1.0%	2.5%	39.9%	56.7%
	合計	0.9%	2.6%	36.9%	59.5%

中1と中3の有意な差はすべてなし

遊べる公園や遊び場」「2. 家庭外で子どもが安心して過ごせる居場所」「8. 経済的支援」「11. 将来の進路や職業を考える機会や出会い」は、約9割の親が必要としていた。「3. 無料あるいは安価で勉強を教える場」「6. 子どもの発達や育ちについて相談する専門機関」「7. 学校についての第三者への相談窓口」「10. 子どもが地域の人々と交流できる機会」は約8割の親、「4. 子どもや子育てについて親どうしおしゃべりができる場」「5. 先輩の父母のお話を聞く機会」は7割の親、「9. 子どもや子育てについての講演会」は7割の親が必要としていた。とくに「とても必要である」が5～6割と多かったのは、「将来の進路や職業を考える機会や出会い」「経済的支援」「公園や遊び場」「安心して過ごせる居場所」であった。中学卒業後に向けての進路に関するサポートと、経済的・物理的支援がより望まれている。なお、経済的ゆとりについての回答は、「ゆとりがない」が全体で15.2%、「あまりゆとりがない」が39.8%、あわせて55.0%であった(表27)。「講演会」は、中1と中3は、「とても必要である」が1割未満であったが、中2は2割を超えており、親の子育ての悩みや迷いを反映しているの

表27 経済的ゆとり(学年別)

		ゆとりがない	あまりゆとりがない	少しゆとりがある	かなりゆとりがある
中1	人数	37	78	77	6
	%	18.7%	39.4%	38.9%	3.0%
中2	人数	4	13	4	0
	%	19.0%	61.9%	19.0%	0.0%
中3	人数	23	76	93	9
	%	11.4%	37.8%	46.3%	4.5%
合計	人数	64	167	174	15
	%	15.2%	39.8%	41.4%	3.6%

中1と中3 χ^2 検定: n.s.

表28 子どもの性質や育て方について積極的に情報を得たい(学年別)

		今あり、このままでよい	今あるが増やしたい	今ないが、このままでよい	今ないので増やしたい
中1	人数	72	72	28	27
	%	36.2%	36.2%	14.1%	13.6%
中2	人数	6	10	2	3
	%	28.6%	47.6%	9.5%	14.3%
中3	人数	84	47	45	24
	%	42.0%	23.5%	22.5%	12.0%
合計	人数	162	129	75	54
	%	38.6%	30.7%	17.9%	12.9%

中1と中3 χ^2 検定: * p <.05

はないかと思われる。

「子どもの性質や育て方について、積極的に情報を得たい」かどうかについて、現状と今後について尋ねた。表28のとおり、全体で4割の親が現状に満足していたが、「今あるがもっと増やしたい」も3割、「今ないので増やしたい」が1割強あった。中3よりも中1の方が、「今あり、このままでよい」がやや少なく、「今あるが増やしたい」が多かった。中2は現状に満足している親が少なく、増やしたいと思っている人が6割ほどいた。

4. まとめと今後の分析すべき課題

本稿では、各質問項目に対する学年ごとの集計を中心に、基礎的データをまとめた。前回調査は、対象の子どもが小学校5年生から中学校1年生であったので、小学生と中学生との違い、つまり「勉強や進路に関しての心配や不安が子どもが中学生になって増大していく一方で、学校・子どもの友人の親・地域社会・行事をもとにしたネットワークへの参加が減少しているということ」が明らかになったが、今回調査では、対象児が同じ中学生であったため、学年間の際だった差はみられなかった。しいていえば、中3の家庭で「子どもと勉強や進路のことについて話をする」が増え、「地域や自治体のイベントや行事に参加すること」が減っていることが挙げられる。そして、小学校の時期に比べると、学校の先生に相談したり要望を伝えたりする親の比率が下がっている。先生の子どもへの目配りや進路や受験に関する情報提供、補習や個別のフォローは中1より中3の方に満足している親が多く、とくに中3での学校の努力も窺われたが、要望がありながら伝えられないでいる親も中学校全体で2割弱いた。親の悩みや要望の内容とそれを相談できる場について、記述回答も含めてその現状をさらに分析していきたい。

今回調査では、親の要望や支援ニーズも尋ねたが、多くのニーズが寄せられた。特に学習上何らかの困難をもっている子どもたちとその親には、より悩みが深く、より支援が求められていることが予想される。子どもの特性とりわけ広汎性発達障害・学習障害・ADHDなどの発達障害に関連のある特徴をもつ子どもの親の、子育て状況や不安、支援ニーズなどを分析し、中学生の時期の支援体制を検討していくことが必要である。

さらに、母親とともに、子ども自身にも家族関係や

学校生活・友達関係、自尊感情等に関する質問紙調査を実施し回答を得ているので、この回答と上記の親の回答とを照合し、親のとらえる子どもの特徴や子育て不安と子ども自身がとらえる生活状況との関連について分析することによって、興味深い結果が得られることが期待できる。そして、親の回答については12年間にわたる縦断的データが蓄積されたので、思春期に家庭や学校で困難を抱える子どもたちの、乳幼児期の特徴や親の意識などとの関連について縦断的に分析していくことによって、子どもの変化や親の意識の変化が明らかになり、障害の早期発見や早期支援の方法を改善・開発することに寄与することができるであろう。

また、今回は、家庭の経済的状況に関して、主観的な経済的ゆとり感と、客観的指標である家庭の年収の両方を質問項目に入れた。家庭の子どもの数等によって、両者の関係は異なってくるのが予想される。今後、家庭の年収や経済的ゆとり感と子育て不安、学校関連不安との関連、そして不安と関連していると思われる親の地域や学校でのつながりと年収及び経済的ゆとり感の関連について分析していくことによって、経済的な視点を考慮した支援方法も検討していきたい。

〈付記〉本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金による研究（基盤研究(C)、平成22年度～25年度、課題番号22500701)「育児困難な親子への支援に関する思春期までの縦断的研究：経済格差・発達障害を中心に」（代表；神田直子、連携研究者；山本理絵、伊田勝彦、小淵隆司、石野陽子）によるものである。

注

*1 愛知県立大学教育福祉学部教授 *2 元愛知県立大学教育福祉学部教授

- 1) 神田直子・山本理絵 2001 子育て困難を抱える親への子育て支援のあり方, 児童教育学科論集, 35, 21-42.
- 2) 山本理絵・神田直子 2003 子育て困難を抱える親への子育て支援のあり方2「育児不安」と性別役割分業・母親役割意識の関連を中心に, 児童教育学科論集, 36, 39-54.
- 3) 山本理絵・神田直子 2003 育児期の困難さに応じた子育て支援, 季刊保育問題研究, 201, 126-140, 新読書社.
- 4) 神田直子・山本理絵 2004 子どもの「育てにくさ」と親の育児不安・マルトリートメント—1歳から4歳の発達の变化—, 児童教育学科論集, 37, 31-40.
- 5) 神田直子・山本理絵 2005 子どもの「育てにくさ」と親の育児不安・マルトリートメント3—1歳から6歳

の横断的分析および3年間の縦断的分析より一, 児童教育学科論集, 38, 1-12.

- 6) 山本理絵・神田直子 2005 子どもの「育てにくさ」と育児不安・マルトリートメント2—4歳児と6歳児を中心に—, 愛知県立大学文学部論集, 児童教育学科編, 53, 33-56.
- 7) 神田直子・山本理絵 2008 幼児期から学童期への移行期における親の子育て状況と不安、支援ニーズ—「第4回愛知の子ども縦断調査」結果第1報—, 愛知県立大学文学部論集, 児童教育学科編, 56, 17-34.
- 8) 神田直子・山本理絵 2010 小学生をもつ親の子育て状況・不安と子どもの特性—「第5回愛知の子ども縦断調査」結果第1報—, 愛知県立大学教育福祉学部論集, 58, 1-10.
- 9) 神田直子・山本理絵 2010 学童期に攻撃行動や不注意の傾向をもつ子どもの幼児期における行動特徴—「第5回愛知の子ども縦断調査」結果第2報—, 大阪千代田短期大学紀要, 39, 1-12.
- 10) 山本理絵・神田直子 2011 子どもの特性とQOL及び母親の子育て不安の関連に関する研究—「第5回愛知の子ども縦断調査」結果分析より—, 愛知県立大学大学院人間発達学研究所, 人間発達学研究, 2, 29-41.
- 11) 神田直子・山本理絵 2011 小・中学生をもつ親の子育て状況と不安、子どもの特性:「第6回愛知の子ども縦断調査」結果(第1報), 大阪千代田短期大学紀要, 40, 27-44.
- 12) 山本理絵 2012 小中学生の心身の健康状態に関する調査研究—不登校意識との関連を中心に—, 愛知県立大学教育福祉学部論集, 60, 47-59.
- 13) 神田直子・山本理絵 2012 LD, PDD傾向の子どもをもつ親の子育て困難感と支援ニーズ—「第6回愛知の子ども縦断調査」結果第2報—, 大阪千代田短期大学紀要, 41, 51-67.
- 14) 根来あゆみ・山下光・竹田契一 2004 発達障害児の主観的育てにくさ感—母親への質問紙調査による検討—, 発達, 97, 13-18, ミネルヴァ書房.
- 15) 文部科学省 2003 「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」調査結果, 文部科学省 2012 通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について.
※「学習面で著しい困難を示す」とは、「聞く」「話す」「読む」「書く」「計算する」「推論する」の一つあるいは複数で著しい困難を示す場合を指し、一方、「行動面で著しい困難を示す」とは、「不注意」、「多動性—衝動性」、あるいは「対人関係やこだわり等」について一つか複数で問題を著しく示す場合を指す。